



## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

タイトル通り。沖ノブ流行れ。

# 目次

やっぱり沖田さんかわいいね♡♡♡♡オ  
ラっ！ ノツブとレズセしろ！！！！！！  
|  
1



やっぱり沖田さんかわいいね♡♡♡♡ オラっ！ ノツブ  
とレズセしろ!!!

日本の夏は絶頂期を迎え、炎天の空は燦々<sup>さんさん</sup>と下々を照りつけている。陽光の降り注ぐ海面は多面鏡の如く白金の光を反射し、波に沿う様に広がる砂浜は、火にかけられたフライパンのように海水浴に来た人々の素足を焼かんばかりであった。

201X年、某月某日の事である。

カルデアの各々は真正正銘、何の偽りもなく、何処ぞの無人島に漂流するということもメソポタミアの女神がレースゲームを開催するということもなく、単なる夏季休暇の一環として日本のとある海水浴場にレイシフトしていた。そこに国連及び魔術協会直属の立場としての目的はない。ただただ度重なる重労働の日々への鬱憤晴らしのためだけに使われた霊子ダイブであった。無論、この事が公に知られば嚴重な処罰は免れない。けれどもカルデアの現最高責任者の「バレなければ問題ではない」という鶴の一声に従い、帰還後にレイシフト記録さえ完全に抹消してしまえばいい。それが彼らの主張であり、人理焼却事件を解決しても、上からは賞賛どころか犯罪者扱いさえされかけた彼らのささやかな反抗心の表れでもあった。

## 閑話休題。

さて、カルデアに召喚された剣士セイバーのクラスのサーヴァント、沖田総司はこの海水浴を心待ちにしていた者の一人であった。というのも、彼女曰く腐れ縁、傍目から見ればつうと言えばかあの関係であるサーヴァント・織田信長に毎年毎年この時期になると、事あるごとに己の水着姿を自慢されていたのである。信長はとある年に行われたレースゲームの際に、装いを新たに霊基を改変する事で水着を手に入れた。生前から新しい物好きとして有名であつた織田信長だからこそ、彼女曰く腐れ縁、傍目から見ればかあと言えばつうの関係である沖田に自慢せずにはいられなかつたらしい。それは長年連れ添つた仲の沖田にも理解していたことであるし、当時もそうなるだろうと予測していたのは違くない。だがそれはそれとして自慢されたからには自分だつてああいう格好をしてみたいと羨む心があつたことは否定できなかつたし、出来るはずもなかつた。彼女が死した後の世において、何故か男として伝えられていた沖田とて、事実として女である。自分だつてお洒落をして、着飾つたりしたいと思わなくもなかつたということだ。

「じゃーん! どうですかノップ。私だつて水着になれるんですからね!」

「それはいいが、お主また星5か沖田ア!」

沖田は誇らしげに自らの肢体を信長に見せつけた。しつこいくらいに自慢されていたので、余程彼女に見せつけたかつたらしい。しかしノップこと信長には沖田の水着よ

りも『星の数』の方が重要だったようで、反射的に中指を立てて激怒していた。

「どう考えても普段星5なんじゃから4でいいじゃろ！ お主は囲いをATMにする姫か！」

酷い言われようである。人斬りサークルの姫だのなんだの普段から信長にからかわれている沖田も黙っちゃいられないと反射的に言い返した。

「そんなの知りませんよ！ 勝手に星5にされてたんですから！ 私だって配布で財布に優しい沖田さんで大勝利させていきたい所存だったんですう〜！」

「なーにが財布に優しい沖田さんじゃ。お主の場合普段の時点で中々ピックアップされないからいざピックアップされたらばちこり貢がれてがっぼがっぼで大勝利の間違いいじゃろ」

「なにを〜?!」

ギヤーギヤーと喚く二人は、普通の観光客が見れば気まずそうに通り過ぎていきそうな光景だったが、カルデアの面々にとつてはああ、いつものか、というものであった。とりあえず相方に会ったら初手で喧嘩売つとけ、が彼女らの馴れ合いの基本であった。

言い合いにひと段落ついた沖田はため息をついた。

「ああもう、本当にノツプは相変わらずですね……。せつかく私が皆さん待望の水着姿を着てるというのに、何とも思わないんですか」

「いや、せやかて沖田」

そう言っようやく信長は沖田をまじまじと見た。沖田の姿は彼女とは違ってビキニタイプの水着ではなかつた。首からゴーグルを下げ、布地が肩から四肢の付け根までを覆っている。日焼けはしたくないのか、新撰組の羽織りを腕を通さずそのまま両肩にかけている。どちらかと言えばこの服装は海というよりプール向きである。

要するにそれは、

「競泳水着とかまたニツチな性癖の困いを生み出す気しかないとしか思えないんじゃない」

「……? そうですか? ダ・ヴィンチさんに泳ぎやすいやつお願いしますっで頼んで作ってもらったものそのまま着たのであんまりわからないんですけど」

「まさかの無自覚じゃったか。尚更タチ悪いなお主。さすが人斬りきたない」

□



夏の太陽は真上に到達し、さらさらとしていながらも、裸足にべったりと吸い付く砂浜は、サーモグラフィで見ると赤を通り越して見た目同様真っ白に染まるほどの熱さになっていた。反対に、透き通った海は波音と共にそんな砂浜の酷暑を飲み込み、波打ち際から熱という熱を奪い去っていった。猛暑であればあるほど、むしろ海の冷たさは際立つようで、浮き輪に身体を任せ漂うだけでも身体から余分な熱が散っていくような感覚を覚える者もいた。

けれども砂浜の熱などものともしない猛者もいるわけで。

「そっ!!」

そこは正しく戦場であった。

浅葱色の風は竜巻を巻き起こすが如く疾走し、弾丸のように球を撃ち出した。球は疾風に乗ったかのように加速していき、一瞬でも気を抜けばその瞬間には文字通り地面を抉り取らんとしている。

「甘いわッ! 茶々ア!」

「ほいきた伯母上!」

しかしそれを座して待つ信長ではない。彼女こそは戦国時代の顔たる織田信長。持ち前の筋力を駆使して跳躍する。同時に彼女の姪にあたる茶々は、「やあーっ!」という



獣の如き咆哮と共に、土方は信長の撃ち放ったボールにアツパーパンチを見舞う。

途端、拮抗する男の拳と炎の剛球。容易く触れれば最期、骨まで死灰にしてしまうのは想像に難くなく、常人であればたちまち逃げ帰るようなそれを、躊躇いなく殴りつけるのは土方が狂戦士のサーヴァントたる由縁か、或いは肉体の損傷を一時的に無効化する宝具「不滅の誠」が発動された証拠か。

だがその答えがどうこうということなどはもはやこの戦場において意味はない。あるのは信長の会心の一撃を、土方の鉄拳が空高く打ち上げた。その決定的な事実だけだった。

「なんじゃと!？」

「うっそお!？」

驚く信長と茶々を他所に土方は沖田に向かって叫ぶ。

「俺がここまでしたんだ、ここで血イ吐いてへマやらかせば腹ア切れよ沖田ア!!」

「お任せください! あつちが反則してくるならこつちも最大限に反則していきますともー!」

———ここに、『誠』の旗を立てる。

その一言と共に、沖田は一振りの旗を砂浜に突き刺した。

刹那。ビーチバレーのコートの半面が浅葱色に染められた。宝具『誠の旗』。新撰組隊士の生きた証たるダンダラ模様には『誠』の一字が刻まれたそれは、新撰組一番隊長である彼女の切り札である。

浅葱色の正体は、彼女の良く見知った者たちであった。近藤勇、永倉新八、斎藤一、原田左之助、芹沢鴨といった、新撰組隊士達のサーヴァントの一斉召喚。『誠の旗』の能力である。

……座から召喚要請を受けて一斉召喚されてみれば、同僚の沖田と土方がビーチバレーで勝つただけに自分たちを召喚したという事実に、彼らは複雑な心持ちなのは、と知らないでもないが、そこは沖田総司である。まあ、沖田さんのことだし、というそれでいいのかわかんばかりの一言で彼らは一瞬で納得していた。是非もないネ。

「さあ行きまますよ皆さん! ノップのヤロウに目に物みせてやりましょう! ——  
新撰組、前進ッ!」

「ッッ!!」

沖田の号令と共に、誠の剣客集団は勝鬨を上げ、土方によって打ち上げられたボールに向かって一斉に跳躍した。

沖田によって召喚された新撰組隊士たちはその一人一人がサーヴァントである。即

ち彼らの身体能力は生前のそれではなく、ボールは空中でトスを受け、またさらに高く跳んだ隊士によって更にトス。それが幾たびも繰り返している内に、ボールは凡そ50mの高さにまで打ち上げられた。

「これで、終わりです！」

一歩音越え、二歩無間——

沖田が跳躍する。否、跳躍ではない。彼女の持つスキル「縮地」による瞬間的な《縦方向への移動》である。通常ならば横方向に移動し奇襲するのが沖田のやり方であるが、遙か上空にまで移動できるのは、敏捷ステータスの高い彼女が即席で生み出した、天才剣士としての技術であった。

とうとう沖田は空中のボールにまで届き、そのまま刀を持つが如く、「平晴眼」の構えを排球に向ける。

そして次の瞬間。

「三步絶『球』！ 無明三段突き——！」

三度の突きが全く同時に放たれる対人魔剣の技巧が、刀からでは無く沖田自身の平手から放たれた。

彼女の一撃を受けた排球に加えられた力は、サーヴァントの力にも耐えられる材質でなければ跡形もなく消失するほどであったが、ボールはそれを耐え抜き、かつそのまま

信長と茶々のコートを一本の槍のように直進した。

「今回の勝負は私たちの勝利です! さあ、覚悟してください!」

沖田は勝利を確信したかのように声を上げる。それは事実である。ボールは瞬く間に地面を抉り取ろうとする。地に立つ二人は成す術なく、どうあがいても、どんな奇跡を手練り寄せようと、どれだけの幸運を使い果たそうとも、二人の敗北は火を見るよりも明らかであった。

——それが、織田信長でなければの話だが。

「——うつけが。儂を誰だと心得る。儂は第六天魔王、織田信長よ。人斬りの一撃なんぞ、赤子の手を捻るよりも容易いわ……!!」

宝具開帳。『第六天魔王波旬〜夏盛〜』。

信長の背から顕現していた獄炎の骸骨は、より力を与えられたかのように巨大化していた。神仏を滅ぼす第六天魔王。神性や神秘を持つ者に対して絶大な力を振り落とす固有結界『第六天魔王波旬』の限定解放と共に放出される魔力が更に膨大になった証拠であった。

ここで記述しておくが、現在の信長のクラスは狂戦士である。即ちその霊基は魔王として恐れられていた織田信長を意味している。要するに、現在の信長はアーチャーの霊基よりも危険な状態であり、その力の片鱗が今、沖田を迎え撃とうとしていた。

『はあああああああああッ!!』

第六天魔王、織田信長。新撰組一番隊隊長、沖田総司。二人の戦いの決着ははたして

□

「のうおき太一。やっぱりあれはわしの勝ちだったと思うんじやが」

「いやいや、どう考えても沖田さん大勝利のムーブだったじゃないですか」

夕暮れ時の浜辺で座り込み、軽口を叩く少女が二人。少し前まではまばらにいた観光客も近くの宿に帰り、辺りにいる人間は彼女たちだけだった。

空の真上で白く輝いていた太陽は、橙色のアクリル絵の具を塗られたあと、グロスバーニツシユで仕上げられたかのような光を海原との接着点で、水平線と並行して撒き散らしている。海面の上に照らされているのは一筋だけで、陽光の当たらない部分の淡い仄暗さは、太陽と海を繋ぐ一直線の道を形作るようなコントラストを生んでいた。

砂浜を見ると波打ち際で誰かが残した砂色の城が、夜が近づくにつれて、文字通り砂上の楼閣の如く崩れかかっている。日中はどここも誰かの足跡を誰かの足が踏みしめていたが、その跡すらも波が連れてきた海中の土に埋められていた。まるで、一日中描き続けた絵を、何の感慨もなく捨てて、また新たなキャンバスをイーゼルに立て掛けるかのように。

まだ少し、ほんの少しだけ明るい黄昏のビーチは、たった二人の少女を引き立てるか



のように、海辺のキャンパスの絵の一部となっていた。

「まさか球が破裂するとはのう。間抜けな音が鳴った時は拍子抜けしたわ。そういうのは火縄銃ぶつ刺さりしてた長篠だけでいいんじゃないが」

「まあ、私の技とノツブの宝具がぶつかったら、如何にダ・ヴィンチさん印のボールでも破裂しますよね流石に。もうちよつと空気読んで破裂してほしかったとは思いますが」

「それなー」

二人の会話は他愛ない、昼間の出来事のことだった。突如始まったビーチバレー勝負の結果は、沖田の三段突きと信長の宝具の衝撃に耐えきれなくなったボールの破裂による引き分けという、なんとというか、彼女らしいぐだぐだした幕切れで終わった。当事者たる沖田も信長も、間の抜けた顔を浮かべて硬直していたのがお互いの目に映ったのが記憶に印象付けていた。

「どうするんです？ 勝った方は負けた方に対する一回絶対命令権ゲットーってやつ」

「あー、そーいやそんなんあったのう。忘れとったわ」

「もう。それ言い出したのノツブじゃないですか。あそこで私が勝ってたら忘れたーとかいっては何らかすつもりだったでしょ」

「なんじゃ。おき太にはわしがそんなつまらん人間に見えるのか？」

「……そう言われたら見えませんが。でもそれはそれとしてなんだかちよつと不完全燃焼って感じですよね」

「わしだけに?」

「上手いこと言つたつもりですか」

はああああああ。と、暮れの浜辺の雰囲気に呑まれたかのような、重いため息を吐く沖田。目線の先はざざーん、と寢息のような波音を立てて、眠りにつくような静けさの海の向こう。郷愁的な真夏の夕暮れは、沖田に1日の呆気ない終わりに対するつまらなさを感じさせていた。

ノスタルジックな沖田の横顔を、信長は物珍しく眺めていた。

（——なんじゃ。沖田の奴、こんな顔もするのか）

沖田と信長の付き合いは長い。勿論、英霊となつてからであるが、度々同じ所に召喚され、その度につるんでいる記憶が彼女らにあつたからである。お互いがお互いを腐れ縁、などとは言っているが、お互いの考えていることもなんとなくわかる、そのくらいの中でもあつた。けれども、今の沖田の顔は、長年付き合ってきたような仲の信長の前でも見せないような珍しい表情であつた。

（……そうやって黙っていればまあ、悪くはない女なんじゃがな）

そう思考を巡らせ、漸く信長は沖田の全体像を見た。すすきのようにしなやかで、月

の光のように透明な姿だった。

濡れた水着がべつたりと付く肌は、生前病弱であったこともあり、雪のように真っ白だ。全体的に黒いハイレグ型に水着は、そんな彼女の肌やなよやかな体の線をかえって目立たせる役割を持った。若々しい肉体は、割られた果実のように瑞々しく感じられた。眩しいばかりに白く研ぎ澄まされた女体である。胸は馬鹿の一つ覚えのような大ききでもなく、かといつて涙を唆るほど発育の乏しいわけでもない、けれどもそのほっそりとした身体と比べると、驚くほど生命力に溢れ、美しく、清潔な豊かさがあった。

「あー！ ノツブ、今私の体見てたでしょう！ ついに沖田さんのパーフェクトボディに気がついたんですね！」

声に気づいて視線を上げると、先程の表情から一転、ニヨニヨ、あるいはニヤニヤといったオノマトペが付きそうな笑みを浮かべている沖田の姿があった。

信長はハン、と鼻で笑うかのような態度で言う。

「<sup>アホウ</sup>阿呆、如何にも人斬りサークルで囲いを生み出しまくってそうな胸してんなって思っただけじゃ」

「とか言っておいてー？ 本当は沖田さんに見惚れてたんでしよう？ もー、ノツブったら素直じゃないですねー♪」

「……………」

沖田は椰揄う口実が出来たと言いたいのか、ここぞとばかりに信長をおちよくった。反対に、信長の方は先刻とは打って変わって黙りこくっている。沖田は凶星と思つたのか、さらに椰揄おうとし、

「ほらほらー、正直になつたらどうですー? もつと見ても——」

「……ほう?」

信長は底冷えするような低い声を出すと共に、勢いよく沖田に迫り、押し倒すかのように彼女に覆いかぶさつた。信長のされるがままのように後ろに倒れ込み、信長はその様子を見て今度はこっちの番とばかりにニヤリと嗤つた。

「——……ふえつ?」

「何を呆けておる。お主が正直になれと言つたからこうしたまでじゃ。不満か?」

突然のことに理解が追いついていないとばかりにきよとんとした顔を浮かべ、上擦つた声を上げた沖田だったが、信長の手が次第に臀部に近づき、彼女の指と布地が触れた所で、ようやく沖田も事の状況を理解したようである。

「……冗談ですよね?」

「儂がここまでして冗談に聞こえるとは、沖田は真性の阿呆らしいな?」

「……誰かが来ても知りませんよ」

「知つたことか」

「……じゃあ私も知りません。勝手にしたらどうですか」

他人事のようなこと言つて、体をうつ伏せにして腕を組み、顔をうずめる。そんな彼女を見て、信長はふつ、と笑つた。やがてそのまま沖田の耳に顔を近づけると、

「……こつちを向け」

「……いやーでーすー」

「いいからこつちに向け沖田。さっきの勝負の続きにもならんじやろうが」

「……勝負？ つて——あ」

思わず、沖田が振り向く。途端、声は途切れ、影が重なる。

暮れの浜辺で響く水音。密着する少女たちは、お互いがお互いの身体の感触を確かめ合おうとするかのように、艶やかしく舌を絡ませあい、次第に息遣いが荒くなる。

「んっ………っはあ、あん………あ」

頬は赤く染まり、唇の隙間を埋めあうかのように塞ぎ合う。熱くなつた唾液と唾液が混ざり、どちらのものかなど最初からわからなくなる。こうなれば沖田も信長を求めよう腕を彼女の背中に回し、信長も沖田の体を抱き締めるような体勢となり、動きにより一層激しさを増していく。

結局、彼女らが宿に帰つてきたのは、誰もが寝静まつた後であつた。そして二人の夜は何処までも続いて——。